

# 土木の意義と意味を 国民との共通認識に

## 土木のターゲットとして

### 「国土」を強く意識した

#### 国土庁時代

——ご就任おめでとうございます。  
大石会長は旧建設省のご出身で、道路局長や技監を務められました。

大石 —— 役所時代の後半は霞が関でしたが、若い頃は自ら手を挙げて地方の土木事務所へ赴任しました。「本省から忘れられるぞ」と忠告されながらも、とにかく現場を知りたかった。おかげで、栃木県では新鬼怒橋の下部工から上部工まで担当するなど、貴重な現場経験ができました。

ただ、結婚が早かったので、家族を連れて転勤を繰り返すのは大変でした。子どもが嫌がらないよう、新任地へ着くとすぐ「次はどこに住みたい?」と問いかけ、転居は当たり前のことだと刷り込んだものです。

その後は、1993年に国土庁へ出向したことが、土木に対する私の認識

に大きな影響を与える契機となりました。省庁再編で両省庁などが統合されて国土交通省になる前は、建設省が事業実施を担い、国土庁がその前提となる総合的な国土計画を策定していたのです。

いかに効率的で安全な国土をつくりあげていくか。——そう考える過程で、われわれ土木人のターゲットが「国土」であるという意識を強く持つようになりました。国土に働きかけ、国土から恵みをいただくのが土木の仕事である、と。私はこれを「国土学」として提唱しています。

——土木学会との関わりは。

大石 —— 入会したのは学生時代ですが、中部地方建設局の企画調査官だった1989年に、名古屋で開かれた全国会が印象に残っています。ちょうど当地で開催されていた世界デザイン博にちなみ、「土木とデザイン」を大会のサブテーマとして提案しました。また、「土木の日」制定10周年の97年に

は、土木の日実行委員長を務めました。

思い返せば、これらの活動も土木の存在や意義を広く社会に理解してもらう活動です。「広報」は当初から一貫して私のテーマでした。2012年に土木広報アクションプラン小委員会ができて委員長となり、現在は土木広報戦略委員会の副委員長を務めています。

## 「城塞」に守られた

### 記憶を持たない日本人の

#### インフラ意識

——土木の意義が国民に理解されていないのは、なぜなのでしょうか。

大石 —— 一つには、日本人が歴史の中でシテイウォール（城壁）というものを持たなかったことが大きい、と私は見えています。城や城塞はインフラの最たるものですが、これに命を守られた市民には当然、インフラの意義が浸透していません。

たとえば、世界遺産にも登録されているフランスのカルカソンヌは、二重



【日 時】  
2017年6月1日(木)  
土木学会役員会議室にて

の城壁に守られた城塞都市です。大西洋と地中海を結ぶ要衝であることから、紀元前からこの地の覇権をめぐって凄惨な戦いが繰り返されました。けれどもこの都市は、堅牢な城壁のおかげで、かのカール大帝の猛攻にも5年間、陥落せずに持ちこたえたと言われています。

翻って日本では、人びとがこのようにインフラに命を守られた経験がありません。だから、土木が生活にいかに近い存在かを気づく素地がない。「インフラストラクチャー」と外来語をそのまま使っているのも、該当する概念が日本語にないからです。

コンビニで手軽に弁当が手に入るのも、蛇口を捻ればいつでも水が飲めるのも、インフラネットワークが整備されているおかげです。しかし残念なことに、そう考える人は誰もいない。私たち土木側も、理解への努力が足りなかったと反省しなければならぬでしょう。

### 土木人よ、土木をより広くとらえよう

——土木学会の会長として重点的に取り組むことについて、方針をお聞かせください。

大石——まず、インフラのストック効果を正しく評価し、世の中へ伝えていくことが必須です。

土木というのはインフラを形成するだけでなく、その成果物を後々まで引き継ぐ「作用」を意味する言葉。つまり、フローではなくストックなのです。しかし、経済学の立場はストックには興味を示しません。これを評価するのはわれわれの役目です。

高速道路や新幹線が開通すれば、移動時間の短縮による効率向上など、企業経営に多大な恩恵をもたらす。また、生活の安全性向上にも貢献する。私が「インフラ整備は公共による公共への奉仕だ」と強調するのはこのことです。

ところが、世の中では「人口減少局面でインフラに投資するのは無駄だ」という誤った認識が幅を利かせています。こうした誤解を解くためにも、インフラストックの経済牽引効果をきちんと評価する手法を開発する必要があると考えています。

もう一つ、土木事業の成果物の「美しさの要素」にも目を向けたい。結果としての機能美、構造美だけでなく、自然や都市や建築物とともに人の目に触れる土木構造物には、デザイン性も重要。「土木人は構造物の美しさにもつ

と関心を払うべきだ」というのが私の持論です。

——土木学会誌の果たすべき役割についてご教示ください。

大石——今こそ、土木の意義と意味を国民と共有しなければなりません。それには、われわれ自身が土木を広く深くとらえ直す必要がある。学会誌には、インフラをめぐる古今東西の歴史や、現代における先進諸国のインフラ投資の情報など、これまで以上に多角的な視点に立った記事を取り上げ、土木を相対化するような誌面づくりを期待しています。

——本日はありがとうございました。

【執筆】三上美絵 / 【撮影】佐野歩海



第105代土木学会会長

大石 久和

OHISHI Hisakazu

【聞き手】舘石 和雄 土木学会誌編集委員長